



学校だより

令和7年度 1月号
令和8年1月 15日
校長 小澤 秋仁

<http://www.kiyose.ed.jp/kiyosetuugakkou/index.html>

二刀流

校長 小澤 秋仁

昨年のメジャーリーグは、なんと言ってもドジャース大谷選手の二刀流で沸きました。2年ぶりのピッチングの復活、2度の手術を乗り越えた不屈の精神に、エネルギーをいただきました。

アメリカなどの海外において大谷選手より前に日本の“二刀流”が流行っていました。二刀流の使い手、剣豪・宮本武蔵が著したと言われる“五輪書”は、ビジネス書のように訳され、1980年代の初めから読まれていたのです。ハーバード・ビジネス・スクールでも取り上げられ、リッツ・カールトン創業者やマイクロソフト創業者ビル・ゲイツ氏などの愛読書としても知られています。

さて、元日恒例の実業団によるニューイヤー駅伝に“二刀流”という言葉をみつけました。GMOが創部10年、7回目の挑戦にして大会新記録で実業団駅伝初優勝を果たしました。そのGMO6区で優勝に貢献したランナー・嶋津雄大さんに関する内容です。

彼は、生まれつき、暗い場所で見えにくくなる「網膜色素変性症」を患っており、病状は年々進行しています。近頃は夜に杖をつくとのこと。「球技はボールが見えなくて、消える魔球みたいになってしまう。それでも走る事はできるので、唯一自分が出来そうな競技が陸上だった。」陸上を始めたのも、きっかけはこの目の病。ハンデをものともせずに、2年連続の区間賞、2区間連続区間新で、初優勝へ大きく貢献しました。彼は、今後の活動について、パラリンピックへの挑戦を表明しました。曰く「もしかしてオリンピック、パラリンピック同時出場も狙えるかもしれない。ちょっとした夢。出るとしたらマラソンだと思うので、そのチャレンジを諦めるつもりはない。来年にマラソンで出場権を狙うことになるかも。駅伝とパラの二刀流で！」と。

2年連続区間新の華々しい活躍そして二刀流への挑戦と明るい材料ばかりですが、かつては練習方法などに苦しました。高校時代は、冬場の朝晩等、周囲が暗い時間帯は足元が見えにくいため、校舎の70メートルほどしかない廊下に照明を灯し、何往復もして走り込みました。ターンの時にスピードを落とすというマイナス。大学時代は、夕方以降の試合や練習で、明るい場所でアップをさせてもらうよう、配慮を周囲に仰ぎながら、自ら環境を整えました。糸余曲折もありました。大学2年生の時に出場した箱根駅伝10区(アンカー)において、11位でタスキを受け取った嶋津選手は2人を抜いて総合9位でフィニッシュし、区間新記録を樹立した上に創部以来の初めてのシード権(10位以内に入ると翌年の出場権が与えられる)を得ました。最高の走りができてしまったがゆえ、この快挙が自身を追い込み、心を削り、バーンアウトしてしまい、休学を決断するのです。しかし、その休学が嶋津選手の心に変化をもたらしました。「自分が勝つ事ばかりであったが、休学を通して人を尊敬できるようになった、仲間の成長を喜べるようになった。」彼が復学するにあたり、仲間たちは何もなかったように受け入れ、体力が落ちゼロからスタートする嶋津選手を支えました。また、かつて部外の人から声を掛けられることにストレスを感じていた嶋津選手でしたが、復帰後は陸上部を応援してくれる人を一人でも増やしたいと広報を作成するなどしたのです。「仲間そして応援してくださる方々に自分は救われた。」と過去に語っていました。

箱根駅伝における快走から休学を経たことは人として大きく成長するために必要な材料となったのです。仲間から支えられ、仲間を支えること、人に感謝することを学んだのです。彼のパラリンピック挑戦に向けての言葉に象徴されます。「同じ病の人たちの代表として走る。」

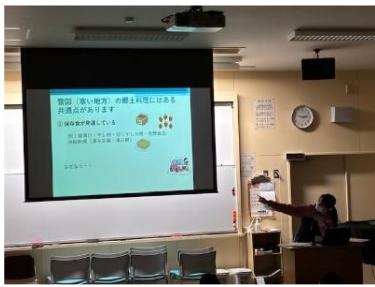
宮本武蔵の言葉、「我事において後悔をせず」病も、休学も、二刀流挑戦も後悔はありません。

オリンピックとパラリンピック、二つを求める島津選手を突き動かすのは、

「見えなくなても走れるようになる覚悟」たった一つの想いです。

教科横断的授業

1年生は1月27日より長野県スキー場にて移動教



室を行います。社会科の雪国の産業とコラボして、総合的な学習の時間に本校栄養士による“雪国の食”について学びまし

た。また、長野県の菅平スキー場を訪ねるということで、長野の特産品についても学びまし



た。長野の特産品である、“寒天”“信州みそ”“あんず”を使った給食『鮭の信州みそ焼き・糸寒天ときのこ汁・信州あんずかん』を19日給食にて提供しました。

音による“伝える力・表現する力”

12月9日、アンサンブル・レネットの皆さんにご来校いただき、音を通した表現活動を行いました。本校は「伝える力・表現する力」の向上を目指しています。

レネットさんの方々の演奏技術に圧倒されましたが、楽器の体験はもちろん、生徒自身が楽器となり、



更には台所用品を楽器にして、音の創り出す世界を学びました。歌ったり跳ねたり叩いたり演じたり、次々くり出す演目で生徒たち

は主体的に取り組み笑顔があふれていきました。「身の回りにあるものはすべて楽器となる。音は笑顔を創り出す」と教えていただきました。結びは質問タイ



ム。「何時間練習するのですか?」との質問に「イベントがなければ、8時間ぐらい」

素敵な演奏は、たゆまぬ練習が支えています。

CS委員会・学校支援本部

生徒会が「球根植え付けボランティア」を募り、チューリップの球根の植え付けを行いました。個の植え付けには、アドバイサーとして、CS委員会・学校支援本部のお力を借りました。チューリップの球根の植え付けに説明が必要なのかと考えてしまったのですが、植え付けを開始するとすぐに理解できました。球根から出てきた芽を根と勘違いし、下向



きに植える生徒がいたのです。日常生活の中で球根を植えることはありません。経験していないことは当然間違えから様々な工夫を生みます。経験は生きる力を育みます。清瀬中ではこれからも体験を大切にしています。

1組 ステップを踏む!

昨年に続き、12月24日に、“ワンステップ”的皆様を講師に迎えて、生バンド演奏によるBGMにのせて、ダンスレッスンを受けました。聞きなれた曲もバンド演奏によって新たな魅力に気づきます。そして体を動かしてダンスを併せていく。なんとも贅沢な時間です。生徒たちは終始笑



顔。人気のプログラムなので一度抽選にもれ、繰り上がり当選で、この機会をいただきました。

清中クラウド

令和7年度後期生徒会は、“清中クラウド”を立ち上げ、生徒からの意見を集めています。現代版目安箱。生徒全員が生徒会員です。みんなで清中を創っていきます。

